

# 足利将棋界 戦後の歩み

令和元年 夏

◎ 日本将棋連盟名誉会員

足利支部 最高顧問 将棋教室長

伏 島 好 勝

## ご 挨拶

謹啓 初夏の候 増々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

この度、日本将棋連盟足利支部総会におきまして足利支部長を退任し支部最高顧問に就任いたしました。

支部長在任中は公私に亘り格別のご懇情を賜り誠に有難く御礼申し上げます。

なお、後任支部長には、酒巻初雄 が就任致しましたので何卒私同様ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。まずは略儀ながら書中をもちまして御礼方々ご挨拶申し上げます。

謹具

令 和 元年 7 月吉日

日本将棋連盟足利支部最高顧問 足利将棋教室々長

伏 島 好 勝



## お礼の言葉

栃木県将棋連盟及び、日本将棋連盟、足利支部設立以来私は足利支部長として 25 年間従事させて頂きました。

その間、大過なく将棋活動に携われたことは、会員の皆様を初め、多くの愛好者、日将連の先生方の絶大なご支援、ご協力の賜物と感謝しております。有難うございました。

私の支部長としての信条は、棋力向上はもとより趣味を通して会員と愛好者相互の親睦を計る事です。亦、将棋から得る人生訓を学び豊かな心で人生を過ごすことと思って頂くことでした。

そのために支部はいろいろ改革に取り組んで参りましたが、中でも大勢の参加を見る子供教室や将棋大会、将棋イベント、市内各地での将棋講座、これらの普及活動等は全国に誇れるものと思っております。

特に支部会員の皆様には、これらの諸行事に積極的に貢献された事であり、厚く御礼申し上げます。

令和元年6月 日本将棋連盟足利支部長 伏 島 好 勝

## 足利支部長退任のご挨拶

この度、令和元年 6 月をもちまして日本将棋連盟足利支部長を退任いたしました。  
支部の前身である栃木県将棋連盟以来、25 年の長きにわたり、ご支援、御指導並びに、ご協力を賜り心より厚く御礼申し上げます。

時代も平成から令和へと移りましたが、引き続き支部の最高顧問として将棋の普及と更なる発展に皆さんと共に歩んで行きたいと思っております。

新体制の足利支部をこれからも一層お引き立ての程、宜しく願い申し上げます。  
令和元年 6 月吉日

◎ 各 位 様

◎ 日本将棋連盟名誉会員 足利支部 最高顧問

◎ 足利将棋教室々長 伏 島 好 勝

日本将棋連盟 足利支部新組織 令和元年 7 月 1 日

新、支部長 酒巻 初雄 ◎ 副支部長 大熊 喜久一

齊藤幸男 ◎ 幹事長 近藤 文雄 ◎ 会計 横山貞明

◎ 監査 粉山秀男 西川恒男

## 新たに足利将棋界戦後の歩み 1

はじめに、昭和 30 年、私は足利将棋界に携わり 40 年栃木県将棋連盟の設立に賛同して県連足利支部の事務局長に選任された。（平成 6 年に県連足利支部長に推薦される）。

この間、栃将連と日本将棋連盟（永沢先生）とのいきさつがあり日将連の個人会員にもなった。昭和 50 年、東京千駄ヶ谷に将棋会館建設の祭には個人ではあるが足利支部の名称で寄付をする。

平成 6 年、栃木県連の副会長に任命され足利支部長を兼任する。

平成 9 年、県連の解散を機に日本将棋連盟の傘下に移行足利支部として、昭和／平成／令和と、半世紀に及び棋界の発展に努めた。

この度、令和元年 6 月 30 日を持って支部長を退任するにあたり、皆さんから過去の出来事など聞きたいと要望され、忘れかけていた懐かしい思い出を辿り乍ら、エピソード等を織り交ぜ綴ってみた。

変り行く歳月の速さに今日まで振りかえる余裕もなく考えもしなかったが確かに昔を知る者は今では私くらいかも知れない。

余談になるが、大正の頃から製麺業を営む我が家は、政府指定工場に登録されていた為、昭和 18 年、戦況の厳しさにつれて、いち早く機械は国のためにと強制供出され仕事を失ってしまった。我が家で働いていた若者達は、出征兵士として戦場へ、父は後に銀行員になるがこの世上では全ての国民も苦渋の体験をしている。

昭和 20 年 2 月、戦局は増々厳しくなり足利地方も空襲の毎日が続いた。（いつでも逃げられるよう着たまま就寝）姿が見えるほど低空で来襲する艦載機（グラマンやカーチス、当時はプロペラ機）から機銃掃射の炸裂音、高度 12000 の上空に銀色に光るボーイング B29 爆撃機 90 機の編隊が襲う、爆撃に迎撃する日本の戦闘機、地上から高射砲の砲火が、そして B29、の 2 機が撃墜される瞬間を目撃し、キリモミ状に墜落していく凄まじさは今でもはっきりと目に焼き付いて離れない。

後日、福居町百頭地区に落下した残骸現場に行き爆撃機の大きさに驚く。

（歩いて現場に行ったが当時、水量の多い渡良瀬川を越えるのは、渡良瀬橋、中橋、のみ、岩井町から対岸の神明の渡し場まで小船に乗り川を渡る。船賃こども 5 銭？自転車 10 銭）。

飛行機工場のある太田市は爆撃により大打撃を受けた。足利も被害に遭う。東京から親と離れて集団で疎開児童来る

日本軍の憲兵隊が駐屯していた母校、助戸小学校（現、東山小）の校庭には爆弾や、焼夷弾の薬莢が山と集められた。

昭和 20 年 8 月 15 日の正午。当時小学生の私はラジオから流れる玉音放送を聞き終戦を知らされた。

戦争の（爪痕）大きな傷跡を残し、戦後は衣食住に事欠き復興も儘ならい混乱の生活が続く中で昭和 22 年、しとしと降る夏の長雨に停電が続いた、物資も少なくローソクさえ乏しい暗闇の生活を強いる悲惨な日々を過ごしていた、そこへ、追い討ちをかけるように大型台

風が関東地方を直撃する。組合で唯一我が家にある情報源のラジオや涼を取る扇風機など、あっても電気は来なくて役に立たない。

雨の降る蒸し暑く寝苦しい不安な夜を過ごしながら私は何時ものように、うちわを片手に蚊帳の中に入った。その時、突如、外でタスケテーと多くの悲鳴が上がる声に飛び起き、雨戸を開けた瞬間、どっと押し寄せる濁流に巻き込まれた。

忘れもしない昭和22年9月15日、夜の9時。台風の来襲で増水した各地の河川が氾濫、大河の渡良瀬川が決壊した。

足利は大洪水に襲われ多くの死者や家屋の流失を出す過去にない大惨事に見舞われ親友の家族や知人等、同級生数人も命を落とした。

我が家も押し寄せる濁流にのみ込まれ、かろうじて家屋は残ったものの、多くを失ってしまった。(戦後、資金を工面して設備をし、元の事業を復活させた矢先、度重なる災難にあう)

以前、天候に左右される仕事をしていた経験から今年(令和元年)の気候も同じような予感がして心配でならない。

(その後、新円の切り替えや、インフレも進み、貨幣価値は下がり、戦前から掛けていた保険など2束3文、保険証券などは紙切れ同然、いったい保険とは何のためだったか)。

高利をうたい文句に金融犯罪や詐欺事件が多発。(保全経済会など数社、後に地金の売買の豊田商事事件)なども横行し死人が出るなど多くの国民が被害を受け混乱の時代が続く。

大災害を受け困窮する生活の現状では当然、趣味、娯楽どころではない、戦前から大衆に親しまれて来た将棋界も当然、戦中、戦後の長い空白が続いた。

やがて、時がたち世の中は落ち着きを取り戻して生活に明るさが見え始めた。

(これ等の逆境にもめげずに立ち向い、苦難を乗り越えて来た当時の人達の・勇気と気力、忍耐、そのバイタリティーには敬服してやまない。

二度とあってほしくないこれらの出来事を後の教訓として忘却せぬうち記録し書き留めて置きたかった)。

世層も良くなるにつれ当時の人々はささやかな憩いを身近に求めた、楽しみを映画や芝居、そして音楽、巷には口三味線入りの縁台将棋等も多く見られる様になった。今の人には口三味線とは？〈遊び言葉〉 -やがて、成長する日本経済の訪れと共に、伝統文化である将棋の利点も高く評価され今日のブーム、発展へとつながっていく。

いつの日でも将棋を指せる様な平和な世の中であってほしいと願うばかりだ。

(本題から大分外れて、自分史的な文面になってしまったが、あまりにも時代のギャップ{隔たり}の大きさに理解されないかと思う、ご容赦を。) 本題次のページへ

令和元年 夏 (伏 島 記)

追記。 正に長い人生には、山あり谷あり、波乱万丈だが、悪いことばかりではない、楽しいこと、嬉しい事も、数多くあった。

将棋とは関係ないが信じられない不可解な面白い話なども沢山ある。(水昌山・足利氏埋蔵金伝説、方言、狐の嫁入りなど多数) 今回は将棋の歩みなので忘れないうちに亦の機会に。

## (本題へ入る)

### 足利将棋界戦後の歩み

**本文 1** 昭和 27 年、足利棋界に大きな影響をもたらしたプロ棋士、「永沢勝雄先生」は、引退後、疎開されて佐野市赤坂に住まわれた。その後将棋の普及や執筆活動に入り、名人戦の観戦記者を務め、号を、「仏法僧」。地元の下野／栃木、両新聞の観戦記も担当、号は「両毛天狗」と名乗っていた。一時期、プロ棋士の金子金五郎、富澤幹雄、両先生が居候されて将棋を教え、佐野城山公園等で大会を開いていた。

永沢先生は温厚なお人柄で訪問すると何時も笑顔で迎えてくれた、くわえタバコに着流し姿が印象に残る。(写真参照 左先生 右 伏島)

先生は足利市十念寺(伊勢 4 丁目)など足利にもよく指導にこられたが、足利から先生宅まで汽車(当時は蒸気機関車)や佐野行きのバス等で通った将棋ファンもいた。

当時は車など持つものはいない。中には遥々足利の三和村松田(足利市に合併する)から自転車を通った強者もいたと聞く。

このような環境のもとで、昭和 30 年頃は佐野市が栃木県一の将棋王国だったと思う。

この時代、佐野の強豪と云えば、高岩吉郎、植木、鈴木清平、高附長男、三柴末吉、(各五段)などの諸氏は、県代表クラスで足利の大会にはいつも参加し忘れられぬ人達だ。

足利の大会には植木氏が帳場に座り責任者を務めた。(当時は、チェスクロックなどない対局が長いと審判が腕時計を持って秒読み)大会では(5 対局制の新券制度／三勝賞／四勝賞)必ず私は上記の 4 人と当てられ対戦し、運良く勝っても新券で再戦してくるのだからたまらない。(力が付いたか市長賞を 3 連覇することが出来た)



## 1-2

進歩する現代将棋ではプロとの力の差は計れないが、佐藤 康光八段（当時）、米長 邦雄八段（当時）中原誠名人、等と角落ちで互角の勝負をしている。（もちろん手加減）

宇都宮勢もレベルは高く、坂本五段対あの有名な真剣師、新宿の殺し屋の異名を持つ、小池重明との一戦は話題を呼んだ。（近代将棋に掲載、団鬼六氏記）

足利の将棋界も組織化の気運が高まり、先生の呼びかけで、足利将棋会を設立することになった。

当時、プロを呼ぶなどして将棋クラブを開業していた今福町の三輪（兵）さん、（弟は阪急ブレーブスの選手からパリーグの審判）趣味の集まりの足利将棋クラブ、助戸クラブ、山川クラブ等と呼びかけて統一（後に大沼田町の棋楽会や有楽町将棋喫茶、新山クラブ（市議の、藤生智弘会長）等出現する）。

昭和32年、永楽町自治会館（当時としては大きな二階建ての大広間があった）に大勢の愛好者を集めた。会場には、お二人のプロ棋士（当時羽織袴の姿で風格もあり威厳があった。多分一人は佐瀬勇次先生）を招聘、足利将棋会が設立された。（足利支部のルーツだろう）。

盛大な開会式が行われて会長には岩下亀三郎氏（元三重村々長、足利市に合併）が選出され会場では指導対局も行われてプロの実力を体験することが出来た。

（足利将棋倶楽部―栃木県将棋連盟足利支部―日本将棋連盟足利支部と継承）

将棋人口は多いものの足利では戦前からの正式な有段者はほんの一握り、当時は段をとる手段もわからない。実力者として知られていたのは 真剣師で有名な長谷川彦之丞四段、（旧制足利中学第1回卒業生、現足高。兄は市議、子息は東北大。当時アマは4段まで）、三輪四段（栃木県大会優勝三輪倶楽部席主）、父の伏島源太郎三段（助戸クラブ会長）成瀬澄雄三段、森島安三三段、（共に県支部長）（森島と伏島は後に四段となる）、山崎健造二段、有坂源次郎二段（後の交竜会顧問）等が有名で、すべて故人。

他にもいたかも知れないが定かでない。

昭和33年、足利で初めて栃木県王将戦が（毎日新聞主催）永楽町会館で開かれた。

私も（事務長）参加したが足利勢は県の強豪を相手に健闘して金星を上げる。成瀬澄雄さんが優勝して王将位を獲得、5段も獲得した。これらの実績が高く評価されて、「田部井智雄、石崎英助、江原芳三、伏島好勝」の4人が入段し、昇段祝賀会がひらかれた。当時として慣例の行事だ。

将棋大会出場者は2級以上がAクラス。3級以下のBクラスは駒落ち戦。30級まで位がある。（大会参加者は毎回50名くらい）

当時の大会はいつも和室、四つ足の盤を借り集め、駒は各自参が多い。タバコの灰皿も用意。靴の取違いや、準備と後かたづけも大変、テレビや冷暖房などない時代だ。宣伝には銭湯などに手書きのポスター。対局に夢中になりお茶をこぼすは物を散らかすはでトラブルも多い。

ある時、目新しい青畳をタバコの火で焦がす不始末が起きた。幸い会員に昼職人の若い

**1-3** 横田さんと熊井戸さんがいて道具もない会場で見事に修復させたのには驚いた。

その後、足利将棋会が消滅。愛棋家で知られている市議会議員の中島滝造氏を会長に立て、新たに足利将棋会を森島安三氏が立ち上げた。大会などは助戸鹿島神社、錦町会館、月例会を会長の中島宅（江川町）や長沼宅（月星ソース）にて行う。しかし永沢先生はこの出来事を心よしとせず憤慨。当時、事務局長をしていた私は、先生から期待されていたので板挟みの窮地にたたされた。（後日先生の了解を得る）。

その後、赤松台の中田さんの紹介で、毎日新聞の宮沢さんが手を差し伸べてくれた。

名人戦が毎日新聞へと復帰を記念して足利毎日杯が誕生する。（会長を飛び超えダイレクトの話でその調整に苦勞した。毎日側は当初から会長を敬遠していたのだ。）

初めての女流棋士第一号の蛸島彰子女流初段を錦町会館にお招きし、毎日杯争奪将棋大会が行なわれた（昭和 50 年頃か？）。当のイベントは大反響を呼び、この大成功に後日毎日側から記者を交えて接待を受けた。席上での話し合いが功を奏し来年も開催することが約束された。

翌年、北村昌男八段ほか有名作家も来会しファンを熱狂させる大会と成った。

（この時、盤の側面に毎日新聞と書かれてある平板の将棋盤や木駒数十組が寄贈された。

盤駒は後の交竜会、そして現在、市民プラザで使用されている。いつの間にか数が少なくなり私も 10 面くらい寄付しているが、当時の担当者も退職してプラザ側には今ではそのことを知る者はいないだろう）。

私が王将駒を作り初めたのはこの頃か。（コレクター物語参照）。 成功を収めた毎日杯をこれからも長く続けていく事が約束されたが、その後、毎日側と M 氏とのトラブルが発生。その企画は残念ながら 2 回で中止となってしまった。

この問題等に M 氏に対し会員が猛反発し会長を失脚させ拠点を長沼宅月星ソース工場 2 階に移して例会などをつづける。その後、工場改築に伴い長沼氏のアパートへ移して再出発するが、夜遅くまで騒がしく近隣迷惑になるので、大塚氏がオーナーになり廃業になっていた錦湯へと場所を移す。その後、近くの一軒家（責任者は大塚氏）を借り受け数年続けられた。大塚氏が高齢の為に引退。縫製業を営む五十嵐さんが江川町の自宅工場跡に足利将棋館を開業させた。（奨励会員を呼ぶなど人気を呼ぶ。石川陽生七段もその一人。）小山市の大多和さん（都名人）もよく見えていた。

昭和 36 年、永沢先生を中心に新たに県南、5 竜会が作られる（足利交竜会、佐野飛竜会、栃木竜王会、栃木日立、小山登竜会）。

以後、足利は交竜会（会長に美つ和印刷社長、市川好三郎氏—成瀬澄雄会長へと引き継ぐ）が主流になるのだが、アキレス将棋部（根岸、中山、江原、山田、人見の諸氏は足利支部の幹事に、西川氏は会計として活躍する。）が集まる山辺駅前の先生、お声がかりの山崎道場が半年後に足利支部に合流しその間、県南 5 市親善将棋団体戦など 10 年以上も続く。

## 1-4

永沢先生の発案で県南（真岡市。鹿沼市を含む）の3段、15人を佐野市に集めて月一回半年間のリーグ戦を行い4段獲得戦を企画する。（それが昭和47年頃かと思うが四段に昇段する事が出来た平成に入り5段）

その2年後、先生が病に伏して入院、闘病生活に入った。下野新聞の観戦記を佐野市の松平新太郎氏が代筆するが、局面の解説に難色を示す宇都宮勢が問題視し宇都宮市職員の成木さん（宮天狗）が代筆をする事になった。しかし、この一件が先生の逆鱗に触れる。

その後、先生との話し合いも決裂した。このような事件が5竜会に影響し解散。

昭和40年頃、早乙女広美五段（宇都宮警察署長）を会長とし旧知の清水和夫五段（一向寺住職）が事務局、副会長に斉藤五段、成瀬五段、幹事長を成木五段、それに県南から幹事に私と数人、県北から知公さん達の数人が選ばれ栃木県将棋連盟が結成された。足利はその支部となる。（歴代の足利支部長―森島安三―成瀬澄雄―阿由葉松利―相場清造―伏島好勝）

宇都宮グランドホテルで毎日新聞主催の名人戦（中原対米長）が行われた。

会いたい人が来るので前夜祭に出席する。清水さん、成木さんなど宇都宮の人達との出会いはもちろんだが、旧知の（足利出身の幼馴染）小池唯夫毎日新聞社長だ（のちにパリーグ会長）。「何十年に成るかね、面影あるよ」などとたわいのない話を交わし忙しいので挨拶程度だ。森山真由美文部大臣ともお会いし話もできて翌日の名人戦を見学する。

4市団体戦が出来たのはこの頃か。

（栃木市で開かれた王将戦「谷川×羽生」の前夜祭にも支部会員と参加する）

平成9年、足利文化協会に入会する。（入会には問題が、後日に）

市民プラザにプロ棋士の飯塚佑紀六段をお招きして入会を祝うイベントを市民プラザで開催した。

平成9年、長く続いた栃将連が解散し、翌年、このメンバーが母体となり日本将棋連盟の傘下に入り足利支部として活躍する事になる。

たびたび前後するが平成6年足利各地で講習会を開き、市民プラザ、助戸クラブ、織姫などの愛好会が誕生し現在に至る。足利支部の幹事でもある長沼氏が助戸3丁目に将棋居酒屋「ひまわり」を開店したのもこの頃か。

平成7年に発足された助戸クラブや商業施設ハーベストの巨大将棋（川崎君）など

これらの栃将連時代から平成の出来事等のエピソードは多くて、またの機会に記したい。（平成4年、館林市六郷公民館との交流や足工大付属高の話は後記に）

平成入って間もなくプラザ愛好会が出来、平成7年助戸将棋クラブ／織姫が出来る。

その後、新山クラブ（会長、藤生智弘市議）、その他にも小さな会が出来ては消えていった。

（ ナンバー 2へ(つづく)

## 足利将棋界戦後の歩み 2

昭和 40 年、足利、佐野の愛好者がプロ棋士との指導対局を望んでいた。成瀬澄雄氏が連盟に電話を掛け、その時応対してくれたのが「飯野健二」当時、奨励会 2 段 18 才（息女が飯野愛女流棋士）。早速、話がまとまり足利通り 2 丁目の割烹旅館、「萬才」に一泊して対局してくれた（足利のメンバーは、成瀬澄雄・山口猛二・石崎英助・伏島好勝・学生の横山貞明。佐野勢は高岩吉郎・高附長男・三柴末吉。共に県大会優勝の経験者）。翌年、奨励会 3 段に昇段されて再度足利の皆さんを指導に（私宅に）来てくれた。

その時の世話人の一人、山口猛二氏は東両毛通運に事務職として勤め、何時も休みの前夜には石崎、伏島の 3 人でよく将棋を指した。

山口氏は升田幸三名人出題の次の一手、日本経済新聞の懸賞問題に応募し唯一の正解者となった。（一 3 角のぞき）名人のはからいで急きょ日経新聞社にて名人と対局することになり東京へ。手合いは、飛車落ち。大勢見守る中で、見事勝利して 2 段を免許された（昔の段は辛い）その後、山口氏は、足利交流会の事務局や会計と、中心的な活躍をすることになる。

資料も乏しく記憶も薄れ、落ちている部分も多くあると思うが田村亀三郎（行政書士の芳雄四段の父）、谷津安三郎、茂木昇（陶芸家でもあり、足高野球部の監督）の 3 氏も、足利将棋界に尽力した人達だ。後日、記述したい。

柳原町の青木氏が、若くして亡くなられたプロ棋士山田道美 9 段の追悼将棋会を家富町自治会館で開く、私は審判に呼ばれ会費等を香典として送る。この頃かと思うが、両毛新聞に、支部員の熱戦棋譜、8 局の自戦記が連日掲載された。

将棋にかかわる話のエピソードなどは沢山あるが、中でも、永沢先生の義兄、荻野龍石（本名、浩吉）氏は大道詰将棋作家として有名な人だ。その本を求めて仕事を兼ねて全国へ大道将棋を商売に旅歩いた真剣師、吉田清三郎さんが我家の裏にいてよく相手をしてくれた。

この時代は世の中が食えないので仕方ない。話には聞いていたが、将棋大会の会場（助戸の神社社務所）にどこで耳にしたのか、噂の、間宮久無齋（真剣師）なる人物が来たのには驚いた。（大会方式は 5 対局帳場が対戦相手決める。新券発売制度 3 勝 4 勝賞あり）エピソードはまたあとで。

将棋界も順調に進み、みんなの会である自覚を高める為、月例会を 2 人 1 組の当番制に決めた。その都度月例会場も変わり。八幡湯―田中湯―錦町会館―田中町―一家富町―有楽町―相生町―一大町の各自治会館等で開く。（将棋連盟会館建設資金にも送金し協力している、東北震災にも募金。）

やはり例会は成瀬さんの経営するスナックが一番多くお世話に成った。（現なるせ葬儀）

また私的な話に戻るが、伊香保温泉のホテル「福一」で名人戦が行われ特別な計らいで対局を身近で見学する。久し振りに伊香保町長に会えることが出来た（親戚筋）。

帰りに棋士の桐谷広人先生が（今はテレビで人気の投資家）足利に寄って有楽町の増山さん宅に一泊し会員と交流を深めた事、近代将棋社長の永井さん（奥さんが佐野市飛駒の出身）、カメラマンの弦巻さん等と会えたことなど思い出は尽きない。

## 2-2

平成 10 年 6 月 13 日、佐野市赤見出流原の一乃館で第 69 期棋聖戦（屋敷×郷田）5 番勝負第 1 局が行われ皆さんと対局姿を身近で見学する（将棋世界 8 月号に私が観戦している写真が掲載）。

伝統文化将棋の次世代への伝承及び普及活動

平成 8 年、助戸／織姫両公民館主催の小学生将棋教室を支援し数年開催する。市民プラザに於いても支部主催の伝統文化こども将棋教室を現在も毎月開催。後に山前福祉会館／葉鹿公民館にて夏休み子供将棋教室を毎年行う。亦、プロ棋士を、お招きして伝統文化親子将棋教室を毎年催し好評を得る。（その他、健康ランドや各公民館など）

つづく



### 足利将棋界戦後の歩み 3

下記は戦後、開設された将棋会所の一覧。

三重倶楽部(今福町)—錦湯—錦町—将棋喫茶(有楽町)—大日西門将棋会所(家富町)—足利将棋館(江川町)—ひまわり(助戸)—阿由葉道場(山川町)—足利将棋倶楽部(東武足利駅前より中川町に移転)、令和の今は足利将棋倶楽部のみ存続している。

桐生／、佐野、両市と親善戦を行なう、後に太田市／伊勢崎市が加わり4市対抗戦へと広がり現在も当番制持ち回りで開催し親睦を深めている。

以前から開催されていたプラザ主催の個人戦将棋大会に、平成 7 年、プラザ側との話し合いで、3 人で1チームを作る休会に成っている職域団体戦が復活した。若い山田久美、女流棋士も見えて、晴れやかな大会と成った、以後、数年続けられる。(この時代は各職場に将棋部があった)

平成に入り私が王将駒を作り出したのはこのころかと思う。(二上会長や新宿将棋センター金田さん)

平成 9 年 3 月、栃木県将棋連盟が解散し日本将棋連盟足利支部時代に入る。  
平成 10 年 7 月、日本将棋連盟の傘下に当初 16 名で登録し足利支部を結成する。(伏島支部長。後に佐野市の渡沼喜好(証券マン、名人戦を全国へ観戦)、吉川宗一先生(足高一佐野高校教訓)、中田茂基(当時、田沼町、県、強豪の一人)の 3 氏も入会する。

3 人の話は長くなるのでまたの機会に。)支部会員は 41 名と成る。

此れからは日将連足利支部時代の活動状況に移る。

市民プラザの企画として、プロ棋士と市民の交流が発案された。支部の渡沼さんは名人戦の追っかけで九州から北海道へと、この道では全国の有名人、箱根の龍宮殿にて行われた 53 期(羽生×森内)名人戦第 5 局にご一緒して痛感する。(伊香保温泉の時も)のちに佐野支部長となるが、旧知の矢内理絵子女流参段にお願いし実現する。このことで、ぜひ話したいことがあるが後日述べたい。以下、矢内—山田久美—中倉彰子—千葉涼子と 4 年続いて女流棋士との指導対局は人気を呼んだ。これを見て足利工業大学将棋部(顧問、詰将棋作家の川瀧先生)部長の、足利支部員でもある渡邊君が学園祭(わたらせ祭)にプロ棋士をぜひ呼びたいと私に相談され実現の運びとなる。(以前から武者野勝己先生をお招きして「わたらせ将棋大会」とした催しはあったが中断)。

女流棋士の矢内さんが当日、祭に都合がつかず代わりに石橋幸緒、女流棋士が奨励会 3 段を連れて来てくれた。翌年は中倉宏美(妹)—村山慈明—田中悠—中倉彰子—渡部愛の諸先生等、毎年棋士を呼んで学園祭を盛り上げた。

ある日、連盟から将棋教室の件で知らせを受けた。そのことの説明、懇談会に出席する。(東京参宮橋駅、下車)オリンピック記念会館にて文化庁の職員や学識パネリストなどを前にして意見の交換がなされ子供教室開校の運びとなった。

この模様はのちに冊子(本)になって出版された。(私の話が記載)

文化庁(助成金)や足利文化課の支援を得て足利子供教室が開校された。毎年プロの先生方が指導に来られた。(山田久美—及川拓馬—佐々木慎—佐藤和俊—加藤一二三と佐藤義則

―瀬川晶司―金井恒太・大島映二―相川春香・ 熊倉紫野―富岡英作と藤田綾―川上猛と相川春香―泉正樹―杉浦八段と竹部さゆり―堀口一史（前夜歓迎懇談会を開く）と貞升南の諸先生。

長く続く将棋界も順風とばかりいかない。支部もそれぞれ考え方や意見の相違などのトラブルもある。（支部入会、文化庁、南幸楽荘―松本氏、県助成金、プラザ、K 氏、N 氏、T 氏、Y 氏と W 氏などの問題も多い。）他市のトラブルを、相談され苦勞も多くあった。ある日、館野氏と相場氏のトラブルが生じて、足利のやすらぎ荘で引き合わせて和解させるなど、気苦勞も大変。会が立派に続けて来られた事に感謝です。 No.4 に**つづく**



## 足利将棋界戦後の歩み 4

遡って昭和 30 年、足利市は将棋の利点が評価されて市民学校に将棋講座を取り入れてくれた。

世話人である成瀬さんから「講座を開くので手伝いを頼む」と私に言ってきた。

会場は出来たばかりの織姫神社下の公民館で開く（のちに移転）、以後、私は足利市から講師として登録された。市民プラザが新築され講座はここに移して続けられる。

中でも、思い出深いのは平成 5 年、障害者のための将棋講座を開いた時だ。多くの皆さんが参加され手話を交えて熱心に取り組む努力、ハンデイを持つ方々の姿勢には頭も下がりがみ上げるものがあり感動した。遠くは桐生市吉沢地区からご夫妻で参加するなど、当時、男性専科的な将棋に、ご夫妻や多くの女性達も講座の 7 日間を休まず受講された。

元号も昭和から平成へ。ある日、連盟から将棋講座の指導者講習会を鹿沼市で行うので参加するように指示をうけた、内容は初心者向きだが、「説明は長くて 20 分迄。それ以上はいけませんよ」と、何度も棋士である講師は強調していた。（この時、飯塚 6 段と角落ちで対戦し、知り合いになり長い付き合いが始まる）2 回目の講習を宇都宮市駒生の健康の森で幹事長の近藤君と受講する。

平成 6 年、毎年宇都宮で行われていた「ねんりんピック県予選」を、初めて県南の足利／佐野市で開催することに成功した。県代表に三将江原、副将松島、大将伏島の 3 人共足利勢が選ばれ全国大会で活躍する。同じ市から 3 人選出は初めての快挙。（47 都道府県に政令都市を含む全国大会。代表 75 チーム出場の中で見事、全国準優勝に輝く）。（江原、伏島は出場 3 回、閉会式では旗手を務めた）。その後、横山貞明、近藤文雄、川島茂の諸氏三人も代表として出場している。

足利老人将棋クラブが「やすらぎ荘」を本部として創立された。初代会長は、森島安三ー 2 代目会長茂木昇（足高野球部監督）。私は顧問に選ばれる。

平成 13 年。支部にビックな話が来た。連盟普及課の中島さんから週刊ポストで将棋の企画があり、お受けしませんかとの知らせだ。折角のお話しに即、受け入れる。

平成 14 年。ポスト誌側から斉藤氏、弦巻カメラマン、レポーターの湯川恵子さん。そして A 級棋士三浦弘行 8 段（羽生 7 冠の一角を崩し当時、話題の人）を伴い来足された。三浦 8 段を囲んで、みやこホテルで盛大な前夜祭を行う。このような大きな出来事を開いたのは初めての経験だ（この模様は後にポスト誌に掲載された）。

翌日、プラザに於いて 3 人の支部員が対局を行なった。初山（2 枚落ち）、横山／近藤（飛落ち）この模様は数週間にわたり週刊ポストに連載され足利の名を全国に発信された。

◎ 追記。足利支部の功績。 足利生涯学習賞受賞。 文化功労表彰。栃木県優良団体表彰。

日本将棋連盟名誉会員、称号。

◎ 支部の年間行事

1 月、新春将棋大会。5 月、足利春まつり。 6 月、子供教室イベント。11 月、文化祭。

(支部開催の将棋大会は関東有数の大会)。支部月例会開催。足利子供将棋教室。  
伝統文化親子将棋教室開催。

◎市民プラザ主催。7月、わたらせ杯／プラザ杯。11月、小・中学生将棋大会等を支援。  
7月、4市親善団体戦。(桐生／太田／伊勢崎／足利) 会場は持ち回り。

◎足利将棋教室で学んだ子供達の成果。令和元年8月現在まで。

倉敷王将戦：若松佑弥。竹熊柊。石原橙真(全国大会準優勝／高学年の部3位)。

さなる杯：前泊慶也(県大会優勝)。

トーマス杯：竹熊柊(優勝)。東京都

ジュニア銀河戦全国大会：若松佑弥(準優勝、優勝)

◎ テレビ取材 〈東北新社〉 足利市長へ表敬訪問

ヤマダ電機杯高崎市：若松佑也(優勝)、◎竹熊柊(優勝)

北陸信越大会：石原橙真(優勝)

朝日アマ名人戦県大会オープン(一般戦)：竹熊柊(優勝)

中学選抜全国大会：竹熊柊(ベスト8、天童市、県代表出場者54人)

中学名人戦全国大会：竹熊柊(ベスト8、各県代表政令市制都市含む出場者200人超)。

群馬県大会優勝。 時崎涼輔、武井柊馬、栗山愉典、上条陸人、(入賞 桜井倫太郎、一圓)

◎私的な話に戻るが足利工業大学付属高校将棋部(顧問桜井先生)からの要望で毎土曜日指導にと誘われ生徒と対局した、思い出が深い。

平成4年、館林六郷公民館のサークルも記したい。私が呼ばれて行くようになってから佐高の生徒を連れて吉川先生が来るようになった。小さな会ではあるが女性が多く会長の平野和子さん、有段者の野中文子さん、阿久津陽子さんは将棋連盟主催のアマ女流戦に出場した(私しも付き添って行ったが)野中文子さんは見事Aクラスの部で優勝、賞状及び、賞品はミシンに副賞多数。Bクラスで阿久津陽子さんも入賞した、しかも阿久津さんは当時中学P、T、A、会長。一緒に来ている子息(埼玉大から先生に)が高校群馬代表として大宰府へ。会は今でも土曜日活動している。

また、佐野市の皆さんと有意義な話や(毛塚佐野市長と棋聖戦、賞の話、秀郷まつり、寺内市議長と子息との出会いプロ棋士と交流の件、渡沼喜好さん／時田茂男さんの話、中原名人、佐藤会長等)。阿由葉道場(元、県連盟支部長の阿由葉松利さん、や相場清造さんとの話し、成駒看板店(吉崎氏)、茂木昇氏、三木ホール、健康ランド、学童、足利子供教室、プラザ愛好会／助戸教室／、織姫教室、ボランティア活動等。他にも話題は沢山あるが後述に。この辺で一旦筆をおさめます。

令和元年8月

日本将棋連盟 名誉会員足利支部最高顧問 伏 島 好 勝

## 足利将棋界戦後の歴史 あとがき

家業を営み殻に籠った生活を送っていた私にとって、趣味である将棋世界は人々との出会いや経験から大変変り有意義な人生を学ぶことが出来た。

懐かしさの想いが先に出て私的な部分が多くなってしまったが、将棋から得た教訓の蓄積を生かしてこれからも末長く楽しんで行きたいと思っている。

常に平常心を失わず、むき出しな感情を抑え、外部からの言動にも左右されず冷静に、思考力、判断力、決断力を身に付けることの大切さを大事にして行きたい。

(次の一手は最後には自分自身が決断して指すのだから自己責任。将棋の話です)

これ等の文は資料も乏しく記憶にもとづき書き記したもので抜けていたり年代も前後し後日書き加え校正や修正も必要かと思う。

劇作家の井上ひさしさん曰く「とにかく物事を難しく表現しがちだが、多くの人に理解されなければ意味がない」。難しいことを優しく、やさしいことを深く、深いことを面白く伝えることの難しさを考えさせられる。

伝統文化でもある将棋を昭和の時代から教えてきた小学生は500人を超すだろう。

現在、社会人としてあらゆる方面で活躍している子供達の噂を耳にすると感慨深いものがある。

令和元年夏

伏島 記



## 足利文化協会将棋部門の支部長退任のご挨拶

昭和40年栃木県将棋連盟が設立され足利支部として活動していた支部は、平成9年足利文化協会に入会しました。その後、栃将連の解散を機に翌10年、日本将棋連盟の傘下に移行し名称を日本将棋連盟足利支部と改めました。

栃将連時代の入会以来23年長きに亘り支部長として協会の将棋部門に従事させて頂きましたがこの度、令和元年6月をもちまして支部長を退任致しました。

在任中は大過なく文化活動に携われた事は協会の皆様のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

顧みますと、人々に親しまれている伝統文化の棋界に於いて支部の存在感は全国に誇れるほどに成長しました。支部が催す活動や次世代への継承等、諸々の行事は他の模範となっております。支部が開く将棋大会では県内はもとより周辺を含めレベルも高く最大規模であり、支部の活動振りは週刊誌や他のマスコミからも大きく取り上げられ広く全国に発信されました。

此れらの実績は栃木県からも高く評価を受け優良団体として表彰。他にも多くの受賞をされております。

私個人としても連盟からアマチアとして数少ない棋界最高位、名誉会員の称号を授かり、日本伝統文化国民協会（平山郁夫会長）からも感謝状を頂き誇りとなっております。

亦、足利名誉市民、元市長、木村浅七先生。日本将棋連盟、大山康晴名人、二上達也会長より為書の色紙も贈られています。

此れからも支部の最高顧問に就任し協会の一員として優れた文化の発展に寄与して行きたいと思います。ご支援有難う御座いました。

令和元年6月30日

足利文化協会 様

日本将棋連盟名誉会員 足利支部最高顧問 伏 島 好 勝



伏島好勝 様

謹啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃は本連盟に格別のご理解とご協力を賜り、心より厚く御礼申しあげます。

さて、貴方様はアマチュアとして将棋界の最高位に位置する方であり、同時に本連盟にとりましては良き理解者、支援者としての信頼を申し上げます。

本連盟といたしましては、平成16年に80周年を迎えてから、感謝と御礼の気持ちを表すべくはじめて「名誉会員」の新設を致しました。

この「名誉会員」は、将棋界の足跡とともに最高の格式をもって貴名を永く棋史に刻むものであり、本連盟の誇りとするための会員であります。

本連盟の理事会の議決を経て貴方様を「名誉会員」としてご案内することになりましたのでご報告をさせていただきます。



平成21年6月吉日

社団法人 日本将棋連盟  
会 長 米長 邦雄